

9) 長期生存率曲線よりみた甲状腺癌の生死予後を規定する因子

—特に乳頭癌について—

筒井 一哉 (県立がんセンター)
新潟病院内科
本間 慶一・根本 啓一 (同 病理)
牧野 春彦・佐野 宗明 (同 外科)
長谷川 聡 (同 耳鼻科)

当院では開設以来、癌患者の生死追跡率は100%である。一般に、経過の長い甲状腺癌について、生死予後を規定する因子を探るため、術後生存率曲線を分析したので報告する。

【対象および方法】対象症例は切除標本を見直し、1991年甲状腺外科検討会で定めた組織学的分類に則り確診し得た440例で、これらの患者の組織型、年齢、性、組織所見で分類し、それぞれ累積生存率曲線を作成し、logrankで有意差検定を行い、生死予後を規定する因子を分析した。【結果】組織型別生存率では、乳頭癌(n=345, 5年86.5%, 10年81.4%, 15年75.2%) 濾胞癌(n=43, 5年52.5%, 10年43.0%, 15年43.0%) 未分化癌(5年11.5%)で有意に乳頭癌が予後良好であった。予後のよい乳頭癌の分析では、男性が有意に(p=0.0163)短命で、年齢では45歳未満は(n=99, 10年100%, 20年91.7%)と予後良好で、遠隔転移例、低分化癌、甲状腺被膜外に発育浸潤したt4, ex2症例は有意に生死予後は不良であった。

10) 上部尿路腫瘍に対する経尿道経尿管の内視鏡手術の試み

西山 勉・照沼 正博 (厚生連長岡中央)
総合病院泌尿器科)

【目的】低悪性度かつ表在性腫瘍と考えられた尿管腫瘍1例と腎盂腫瘍1例に対して経尿道経尿管の腫瘍切除術を試みた。【対象ならびに方法】対象は低悪性度かつ表在性腫瘍と考えられた尿管腫瘍1例と腎盂腫瘍1例で、すべて男性で、年齢は63才と65才であった。2例とも両腎機能は正常であった。尿管腫瘍に対しては硬性尿管腫瘍切除鏡を、腎盂腫瘍に関しては軟性腎盂尿管鏡を用いた。【結果】尿管腫瘍に関しては膀胱腫瘍切除術と同様に切除可能であった。腎盂腫瘍に関してはループ鉗子、凝固子を用いることにより腫瘍を完全に除去できた。腎盂腫瘍症例では術後9ヶ月で再発を認めていない。尿管腫瘍症例術後3年目で膀胱内再発を認めたが、腎盂尿管内に再発は認めていない。【結語】低悪性度かつ表在性

上部尿路腫瘍に対しては経尿道、経尿管的な内視鏡を用いた腎保存手術が低侵襲性で、かつ良好な治療結果をもたらすものと思われた。

11) シスプラチンを含む肺癌化学療法時の急性遅発性悪心嘔吐に対するグラニセトロン、ステロイド、メトクロプラミドの無作為比較試験

新保 俊光・村井 政子
伊藤 重雄・鈴木 善幸
宮尾 浩美・横山 晶 (県立がんセンター)
栗田 雄三 (新潟病院内科)

【目的】シスプラチン使用時に用いるグラニセトロン・ステロイド・メトクロプラミド3剤を、組み合わせと投与回数により4群に分け、その急性および遅発性消化器症状に対する予防効果と使用法を検討する。

【対象】シスプラチンを初めて使用する肺癌患者60名。

【方法】A群; グラニセトロン 3mg+デカドロン, B群; A群+メトクロプラミド, C群; グラニセトロン 6mg+デカドロン, D群; C群+メトクロプラミド, のいずれかを無作為抽出により使用し、悪心の程度、嘔吐回数、食事摂取量、および visual analogue scale を用いた QOL の調査を行った。

【結果】現在症例を集積中であるが、急性消化器症状に対しては、いずれの群と良好な結果であった。遅発性消化器症状に対しても解析し発表する。

12) 悪性リンパ腫に対する末梢血幹細胞移植併用超大量化学療法

渡辺 卓也・張 高明
相場 恒男・柏村 浩
石黒 卓朗・新保 俊光 (県立がんセンター)
林 直樹 (新潟病院内科)

悪性リンパ腫における化学療法時の末梢血幹細胞の採取法および移植後の造血能の回復について検討し、初発例および再発例に対する超大量療法の忍容性とその臨床効果について検討した。9例(初発:4, 再発:5)がエントリーされ、末梢血幹細胞採取を兼ねた導入化学療法は再発例ではDHAP, ECAM, PCB, MECP, 初発例ではCHOP と high-dose CPM と high-dose VP-16 を実施した。化学療法終了後早期にG-CSFを開始し、白血球数が1万を超えた時点で末梢血単核球成分を採取・凍結保存した。全ての併用化学療法+G-CSFの組み合わせで移植に必要な幹細胞数(1×10^5 /kg以上)が採取